

# 不確かなセクシュアリティをケアする場 —レズビアン・バイセクシュアル女性のためのセンターLOUDの事例より

The topos of caring for precarious Sexuality

—A case study of the Lesbian and Bisexual center “LOUD”

学籍番号 47126779

氏名 座間 聖季 (Zama, Saki)

指導教員 清水 亮 准教授

## I. 問題の所在

近年、LGBT<sup>1</sup>と呼ばれるセクシュアルマイノリティ<sup>2</sup>らの存在は、人権問題や経済的な側面から注目される。日本でも、2015年に渋谷区で「同性パートナーシップ条例」と呼ばれる同性間のパートナーシップを認める条例が可決された。この条例や、6万人を動員した「東京レインボープライド」というセクシュアルマイノリティ当事者らの運動、同性婚などがメディアによって取り上げられ、LGBTは認知度を高めつつある。しかし、表舞台に立てる「シャイニー」ゲイ<sup>3</sup>が顕在化する一方、そうではない無職やホームレスを含めた「シャイニくない」ゲイの存在は知られることがなく、いないものとして扱われる。見えづらく、生きていくとして捉えられない<生>は、傷ついたり失われたりしても気づかれることすらない (バトラー、2012) かもしれない。

セクシュアリティをめぐる日本の研究は、1990年代以降、社会学を中心に理論・調査

研究が進められた。論点は、性にまつわるアイデンティティから、あえてゲイであることを主張する政治的な活動へと移る。2000年代には他者との関係性をめぐる、コミュニティの実践とアイデンティティ形成について観察される。エイジングや人とのつながりの観点から、異性愛者の生き方を相対化 (小倉、2001) するなど、性は<生>の問題として扱われつつあるが、当事者のコミュニティ参加の経験については、実証を通して明らかにされていない。

## II. 本研究の目的と構成

周縁化された市井の当事者らの抱える問題を照射するとともに、意図をもって他者のためになろうとする「ケア」という行為 (Engster, 2007) がどのように処されるかについて、レズビアン・バイセクシュアル女性のためのスペース LOUD を事例として研究する。2015年5月から2016年1月の間、東京都中野区にあるLOUDを中心に参与観察及びヒアリング等を実施した。

本論では、セクシュアルマイノリティ当事者の抱える問題を、不可視という点に限らず、自己疎外から生じた「不確かなセクシュアリティ」として設定する。異性愛を規範とした社会において「変態」のレッ

1 レズビアン (L)、ゲイ (G)、バイセクシュアル (B)、トランスジェンダー (T)。

2 性的指向 (好きになる性)・性自認 (ココロの性) における社会的少数者。

3 輝かしい (シャイニーな) LGBT 当事者を称して、用いられることがある用語。

ルを押し付けられた当事者らは教育・就業・家族創出の場面で、人格的同一性に対する権利の剥奪、社会的価値や尊厳の剥奪といった「社会的な創傷」(成、2004)の経験を重ねる。特にセクシュアルマイノリティ女性のセクシュアリティについて、レズビアンであれば、発達過程における未成熟さとして取り合われぬ「不承認」ないし、過剰なポルノグラフィや性的イメージといった「歪められた承認」を受ける(掛札、1992)。セクシュアルマイノリティ当事者は、ときに自死に至るような自己否定的な価値観を内面化する。だが、関係性を壊したくない身近な他者にさえ語り出すことができず孤立しやすい。当事者のセクシュアリティは、繰り返される自問により確立しづらい。ケアは、誰しものが受ける他者への配慮とされる。このようなセクシュアリティとともにある当事者の〈生〉が黙殺されないためのケアについて検討したい。

尚、分析の視点は、アイデンティティとスティグマの議論を参照し、アイデンティティが固定的でなく他者との関係における実践を通じて構築される立場に依拠する。

### Ⅲ.セクシュアルマイノリティ女性のためのスペース LOUD

中野区のアパートの一室にある LOUD は”社会に対して発言する”セクシュアルマイノリティ女性のための開かれた場所である。開放日のイベント、団体活動に利用できるスペースの貸出、セクシュアリティ関連の蔵書の管理等を、設立当初から関わっていたスタッフが「手弁当」で運営する。

LOUD の設立経緯は、ウーマンリブとゲイリブの影響を受ける。設立時の 1995 年より前に、男女雇用機会均等法等を争点に内

部分裂した女性の権利運動のグループの一部は、レズビアンとフェミニストの活動家をつなごうと試みた。政治的な連帯感や「レズビアンであればフェミニストでなければならない」という規範をもつレズビアン当事者の集まりは存在したが、それは次世代のセクシュアルマイノリティ当事者にとっては一括りに語ることがない「私らしさ」への違和感を生じさせた。同時期には、メンバーのみに発刊されるミニコミ誌「LABRYS」を通じた、レズビアン・バイセクシュアル当事者間の交流が全国規模で盛んであった。ただし「府中青年の家事件」において当事者団体が公共施設利用時に差別による利用拒否を受けたような、明らかなセクシュアルマイノリティへの嫌悪と排除が社会に存在したため、当事者同士が顔を合わせて出会うことが難しかった。以上の背景を通じて、一人一人のセクシュアリティの「差異」を強調し、「安全」に顔を合わせて社会活動のできる場を提供するために LOUD は設立された。

設立先の中野区は、ゲイ当事者らが集まる新宿二丁目の盛り場からほど近く、地価や物価の面から生活のしやすい地域である。行政もまた当事者のための制度設計に積極的であり、特別ではない当事者の日常の場となるよう、LOUD の立地先に選ばれた。

設立時の理念について、「社会に対しての発言」のための「安全」な場は、「当事者の孤立」に対して必要とされているという。「ここに行けば自分の気持ちがわかってもらえるとか(略)肯定的に過ごせるような場所」(2015.8.4.O 氏ヒアリング)にしたいという。参加者や、LOUD の利用団体は LOUD 内にある全国の情報や多分野の蔵書

から情報収集し、ときに情報提供や蔵書を寄付していく。運営スタッフらのやりがいの一つは、LOUD をコミュニティセンターとして、いつでも当事者が訪れることができるような場所にすることだ。

#### IV. LOUD オープンデーの役割

オープンデーは LOUD 設立時以降続けられてきた、毎月の開放日である。参加者は予約することなく、午後3時から6時の好きな時間に来て帰ることができる場だ。セクシュアリティを問わず、セクシュアルマイノリティ女性の存在への理解という LOUD の趣旨に賛同できる人であれば誰でも参加できる。スタッフらは会場準備や受付といった参加者への介入を最小限にすることを意識しており、オープンデーの時間内に自己紹介やテーマセッションの時間を設けない。それは、初めてレズビアンコミュニティに参加したときの、「いろいろ聞かれるんじゃないか」という不安や「初めてのころ」について、スタッフら自身が知るがゆえの共通意識によるという。

オープンデー参加者の年代・セクシュアリティは多岐にわたり、続けて来ることもあれば、数年ぶりに参加する人もいる。参加者の動機や語りを捉えようとすると、自分についての「わからない」状態が受容されることや、誰かに「出会う」ニーズを満たせるのが、場の特徴だとわかる。

ボーイッシュな印象の、参加者の A.I.氏は、自分がトランスかもしれないと考えて手掛かりを求めて参加した集まりで、不当に体を見せることを要求された。電話相談から紹介されて、信頼できる LOUD に参加した。オープンデーでは、当事者をモデルに描いた本を開きながら、他の参加者と共

に定まりきらない自分のセクシュアリティについて説明を試みる。カミングアウト<sup>4</sup>していない職場で起きた、異性愛者を前提としたライフスタイルの話題を前にしたときの感じ方といった「あるあるの話」ができることが、この場の良さだという。

自分以外の当事者とセクシュアリティについて話したいという動機で参加する T氏は、レズビアンの自認をもってオープンデーに参加した。スタッフと交流する中で、LOUD のスペースを使ったカウンセリング会を開始した。自らの経験をもとに、行けば誰かがいるような気楽な場所を作ろうと試みる。

ロングヘアで柔らかい印象のトランスの A氏は戸籍上男性のレズビアンである。以前は GID<sup>5</sup>当事者の集まりに参加していた。好きになるのが男性か女性かわからない上にトランス<sup>6</sup>の自分が行ける場所が分からず、友人から行ける場があると聞き参加した。「皮膚感覚で嫌」という理由からトランスのレズビアンが参加できないレズビアン当事者のためのイベントは存在し、そのことを知るトランスのレズビアンは、参加してみようという試みさえ躊躇うことがある。

LOUD では、自問の渦中で語りえない不確かなセクシュアリティが否定されない安心な場として求められる。

#### V. 考察

ある LOUD 参加者は、セクシュアルマイノリティの存在について、「100%オールオープンにはできない」「一生自分との闘い」であると語る。また、ある当事者は生

<sup>4</sup> 自分のセクシュアリティを説明すること。

<sup>5</sup> トランスへの診断名、性同一性障害。

<sup>6</sup> 自分のジェンダーに違和感を持つ人。

活する上での困難は「自分と他人との接点」に生じるといい、ゆえにセクシュアリティは語られざるものとして扱われる。

LOUD は<開かれた>場であるべきという理念のもと、設立され運営されてきた。これが当事者に意味するのは以下の三点だ。

①誰でも”行ける”—マイノリティ内のマイノリティを排除しない。 ②”入れる”空気感—他者へのわかりあえなさを認めた共感がある。 ③”出ていける”関係性—外の社会や活動団体につながりが広がる。

また、社会に<開かれた>場は、社会的にセクシュアルマイノリティ女性の存在を示す活動拠点を提供するにとどまらず、それらの活動は当事者にとって自己肯定の経験として作用する。それは確立されていないセクシュアリティのあり方を決める契機を、自らの手に取り戻すことになるからだ。

このようなく開かれた>場は、その場の存在自体がケアであると言えるだろう。ケアの定義について、対人関係における直接的なニーズを満たすことに限らず、相手のため (for good) への配慮全般を指すことが議論されてきた。

哲学者の鷺田は、誰かの言葉を迎えにいかず語りを「待つ」ことについて、期待すら放棄された地点で相手の「応え」を受け入れることだと述べ、「身を開く」と表現する(鷺田、2006)。祈りを込めなおすように、「幾度となくくりかえされるそれへの断念のなかでもそれを手放すことなくいること」が「待つ」ことだという。そうであれば、LOUD とは、応えを受け入れるようなく開かれた>形で、不確かな (precarious) セクシュアリティと<生>が語り出される瞬間を「待つ」場としてのケアの意義があ

るのだろう。多様性を称揚するリベラリズムの下、アイデンティティの承認が「命にかかわるニーズ」(岡野、2006)として希求されるほどに、一時的に応えを留められる場はケアとなる。

セクシュアリティというアイデンティティに限らず、意のままにならない他者との関係によって人は「何者と呼ばれるのか」という問いに直面する。セクシュアリティをめぐるケアの議論は、当事者のためだけのものではないかもしれない。なぜならば、何時・何処で・何事においても、常にマイノリティではないと断言できる<生>のありかたはそれほど多くないはずなのだ。

---

## 参考文献

Engster, Daniel, 2007, *The Heart of Justice: A Political Theory of Caring*, Oxford UP.

岡野八代,2006,『承認の政治』に賭けられているもの：解放か権利の平等か『法社会学』64.

小倉康嗣,2001,「ゲイの老後は悲惨か?—再帰的近代としての高齢化社会とゲイのエイジング」伏見憲明編,『クィア・ジャパン』勁草書房,5.

掛札悠子, 1992,『レズビアン』であるということ』河出書房新書.

ジュディス・バトラー,2012,『戦争の枠組—生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳,筑摩書房.

成元哲,2004,「なぜ人は社会運動に関わるのか——運動参加の承認論的展開」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編,『社会運動の社会学』有斐閣.

鷺田清一,2006,『「待つ」ということ』角川選書.